神堀忍博士年譜

昭和三年（一九二八年）

七月十七日、広島県高田郡生桑村生田（現、高宮町）において、父和田早身（はや。八月児ゆえの命名。他兄弟は勝・教人ほか）、母チヱの長男として出生。のち、昭和七年（一九三二年）和田家の養女（母）・入婿（父）の両人の出奔に伴われて、父の勤務先大日本法令出版（株）の当時の外販担当地域の拠点大阪市に至り、同市天王寺区小宮町に仮寓。父の旧籍（広島県高田郡来原村原田。現、高宮町）に編入し、神堀と改姓（本家は高橋）。

昭和八年（一九三三年）

八月、急遽帰広し、広島市（現、西区）観音町に仮寓（和田家の祖父、広島県立病院に入院、翌九年十一月死去。その看取りのためにも。）。

昭和九年（一九三四年）

二月、広島市大手町八丁目一四五（現、中区大手町五丁目）に移居（小学校卒業まで居住）。

四月一日、同町内のハフリ幼稚園（日本基督教団バプテスト派広島鷹野橋教会〈同市（現、中区）国泰寺町所在〉の流を汲む）に入園。以後、小学校卒業まで、右教会の日曜学校に通い、同教会の諸行事にも参加。

昭和十年（一九三五年）

三月、右幼稚園修了。

四月一日、広島市立大手町尋常高等小学校に入学。一、二年生の間は虚弱児学級生。三年生からは男・女別学。

昭和十六年（一九四一年）

三月三十一日、右尋常高等小学校、尋常科の課程を修了し卒業。

（四月以降、大手町国民学校と改称。）

昭和二十年八月六日のアメリカ軍機投下の原子爆弾により同校も損壊全焼。後日の新市街地計画により跡地は五十嵐道路により分断、一部は公共機関用地等になる。学区再編により、昭和二十年三月卒業の二十四期生を限りに廃校。当日被爆した人、後日救援活動等に従事し二次被爆した人の中に幼少時よりの師友、同上家族等多数物故者としてあり。

四月一日、大阪府立住吉中学校に入学。

父は勤務先の阪神地区担当としてすでに大阪市西区土佐堀通三丁目三〇に

居住。母とともに移住。

昭和十九年（一九四四年）

八月二日、この日から、政府決定（三月はじめ）の学徒勤労動員の通年実施に伴い、大阪市西成区津守町所在の昭和起重機製作所（当時は「神武第八六〇〇番工場」と呼称）に出動（ボクは鋳造部門に配属）。われら住吉中学四年三組生（学級担任伊東静雄先生）は、住友製鋼(株)和歌山工場に納入の天井走行型起重機一台を原図から一貫製作した。

昭和二十年（一九四五年）

三月十四日、十三日夜からのアメリカ軍機大空襲により右記居所で罹災。焼夷弾の落下直撃により全焼。

指示に従い、ひとまず大阪市役所（北区中之島）に避難。のち、父の勤務先第一法規出版（株）（内閣情報局の設立した日本出版文化協会の懲戒した業界の統合再編により大日本法令出版ほかは昭和十八年二月より上記新社を設立）の大阪営業所（大阪市東区（現、中央区）北浜三丁目所在）に暫時の寄寓。ついで、兵庫県川西町（現、川西市）小戸（おお）べの長沢家に身を寄せる。

三月三十一日、右、住吉中学校を五年生とともに四年間で繰上げ卒業（昭和十八年四月に決定した修業年限の一年短縮の適用実施による）。

四月一日、立命館専門学校法律学科に入学。

立命館禁衛隊に加わるとの宣誓式もあった。しかし、昭和十八年六月の「学徒戦時動員体制確立要綱」により学業を休止して軍需生産に従事することになっているので、陸軍の宇治火薬廠に出動。さらに、休日には京都市上京区の本校において講義（大日本帝国憲法、民法、国体論など）、教練（おもに銃剣術。これは梨木神社の境内で）をすると、いわれる。

ところで、宇治での最初の仕事は、上級軍人の官舎から疎開荷物を馬車・貨車に積載し、指示に従い牛馬に代り牽引・移動すること。空襲警報のたび毎に、火薬類に係わっている者たちはそれらを防空壕に格納し、学徒のわれわれはアメリカ軍機による機銃掃射を覚悟して、黄檗山萬福寺を指して駈足で待避する。

さらに、昭和十八年十二月に公布の特令により徴兵適用年齢を一年引下げたのに引続き、十九年十月には陸軍は兵役法施行規則を改正公布し、満十七歳以上を兵役に編入することにした。これにより、次々と同級生が帰郷する。（すべてが兵役のためではなく、どうせ徴兵されるなら、ここでこんなことをしているよりは、残された時間を故郷の山河に懐かれて心静かに…と思った退散者もいたはずだ。極端には、仮病を使って帰郷する秘術の伝授とやらが囁かれていたようだが、あいにく聞き洩らした。）かような折、彼らの壮行会と称するものを催し、巧みにまとめ上げる者がいる。われら齊二歳にとって恐しいのは、酔余強引に、会後本日の賓客を拉致して島原とか橋本とかどこそこへと繰り出すに際し、同席者をもかなり力ずくで勧誘することである。そこには、上ずった「本土決戦」の声が聞こえ

はじめた中、奇妙な開放感、あるいはヤケッパチとかを装った悲壮の感が漂っているようにも思えた。

ここ宇治は、交通の便がよろしくない上に、遠方から通勤する者がかなり居り（小生もその一人）、あれやこれやで勤労意欲の低下はなはだしい。

五月のうちに早々に退学して、住吉中学校の補習科に通うことにする。とはいうものの、ここも堺市三宝浜の高田アルミへの通年の勤労動員であった。

八月、ポツダム宣言を黙殺して十日、広島・長崎に投下された「新型爆弾」により惨禍を蒙ったのち、やっと、いわゆる「玉音放送」という名の勅語を聞いたのも、ここでの暑い日のことであった。

十二月、ある方のご好意に与かり、大阪府池田市石橋（現、一丁目）の商店街において罹災後はじめて一家だけで暮らす。商売する才覚のない者には、燈火管制のない商店街の年末はとりわけ気忙しかった。

昭和二十一年（一九四六年）

二月、右の仮寓に商人が入居するので、同市石橋（現、三丁目）に移り寄寓。

四月一日、大阪第二師範学校本科に入学。同市内なので徒歩通学。

昭和二十二年（一九四七年）

五月、大阪市大淀区中津浜通四丁目の、父の旧知の印刷所所有でかなり広い焼跡地のほぼ中央部に設置した番小屋風仮設住宅に侘び住まい。

昭和二十四年（一九四九年）

三月三十一日、大阪第二師範学校本科国語漢文専攻課程を卒業。卒業レポート題目「芭蕉と萬葉集」。赴任校は、内示では大阪市立西淀川一中。

四月一日

辞令に従い、大阪市立西淀川第二中学校に赴任。

一中では担任クラスを設け、国語のみ担当として待ち受けていた。

二中では、社会科担当。学級担任として予定せず。

要するに、困惑しきっている一人の若者をそっちのけにして、オトナたちは、貸し・借りの決着は先に廻して、当局のメンツを立て、三者穏便にということでコトを運んだ。でも、やはり、ボクは二中の余計者。

二中（のち西淀中と改称。新校舎に移るまで市立姫島小に仮住まい）は、全教科のコアとなる重要な教科である「社会」の研究指定校（校長・教頭ともに社会科担当）。キミには、教頭指導のもとに教科研究・カリキュラム策定・学習指導法等全般におよぶ研究に参加してもらう。したがって、現場での時間数は少いが、担当教科は「社会」である、とは学校長の弁。校長は、さらに新教育の拠点の一つとなる図書室の設置準備を全面的に任せる、教頭の指示のもと推進するように、という。その後も、長期欠席生の家庭訪問をはじめ、のちの特殊学級設置の試みまで手広く体験させてくれた。専門の「国語」は進学希望者対象の補習で存分にとおだてられ、個別指導までした。秋には、東区（現、中央区）大手前の国民会館を会場に文化祭めいた華やいだ催しで、一騎当千の先輩たちの活躍を目のあたりに

して自分の無能無才を思い知る。あれやこれやで痛切に自己の再教育の必要を覚え、二学期で挫折。

昭和二十五年（一九五〇年）

四月一日、関西大学文学部国文学科三年次に編入学。

六月十一日、関西大学国文学会研究発表会（天六学舎）において、「幻住庵記中の『萬葉集の姿』」を発表。

昭和二十六年（一九五一年）

一月十九日、関西大学国文学会研究発表会（千里山学舎）において、「愚管抄における慈圓の言語意識」を発表。

五月某日、大阪市西区阿波堀通二丁目三四所在の、父の勤務先第一法規出版（株）の、木の香かぐわしい社宅にやっと落着くことができた。

五月十三日、関西大学国文学会研究発表会（天六学舎）において、「『はしだての』小考」を発表。

六月以降、澤瀉久孝先生（昭和二十六年四月、関西大学にご来任）のご下命により吉永登先生の下で「萬葉學會」設立の下準備に従事。早急のことて振替口座開設に手間どるのを案じ、小生の父の手許にある口座の一つ（大阪二九一四七。現、〇〇九〇〇―七―二九一四七）を名義変更して利用。専ら振替用紙、機関誌発送用封筒（手づくり時代がかなり続いた）を吉永先生のご指示により調達・調製する。この後、木下正俊氏（現、名誉教授）の関西大学への来任（昭和三十三年四月）まで事務局の雑務的部分を補助。

その後、機関誌「萬葉」の発送事務も大宝印刷（株）のご厚意に甘えることとなる。学園紛争後は事務のかなりの部分を沓肆大地（廣部重汪氏）の犠牲的ご奉仕に全面的にお縋りした。

十月十四日、ルース台風襲来（死者・行方不明あわせて一二〇〇人）。社宅裏が広い空地であったこともあり、床下を吹き抜ける風により畳が浮き上がるほどだった。昨二十五年九月三日の関西直撃のジェーン台風（三三六人死亡）も凄かった。このころの台風は、まことにきつかった。

十二月一日、関西大学国文学会研究発表会（千里山学舎）において、「平家物語の和歌」を発表。

昭和二十七年（一九五二年）

三月三十一日、関西大学文学部国文学科を卒業。卒業論文題目は「萬葉集の用字に関する一考察――その数字使用を中心として――」。

四月一日、関西大学大学院文学研究科修士課程国語及び国文学専攻に入学。

四月十日、関西大学附属第一高等学校非常勤講師を依嘱される（昭和三十年三月三十一日まで、更改依嘱。本年九月、校名より「附属」を除く）。

五月二十三日、関西大学国文学会研究発表会（図書館）において、「萬葉集の法制二つ」を発表。

昭和二十八年（一九五三年）

四月十九日、藝林會例会（奈良、春日大社）において、「萬葉集表現のある場合」を発表。

五月十九日、関西大学国文学会研究発表会（図書館）において、「萬葉の遊戯二つ」を発表。

十一月、関大一高、天六学舎より現在地に新築移転。夜間課程は昭和三十年三月有終まで天六学舎。

昭和二十九年（一九五四年）

八月より吹田市千里山一二〇（のち、千里山西四丁目一八ノ三と改制）に移居。

昭和三十年（一九五五年）

四月一日、関西大学第一高等学校専任講師に就任。ただちに学級を担任し、10期（33年春卒）・13期（36年春卒）の二期を持上がる。

校務分掌は生徒係（現、生活指導部）。以後、昭和三十六年三月末日まで。

この間、相次いで映画研究部・郵便友の会、ボクシング同好会・空手同好会（ともに部昇格まで）等の顧問も兼ねる。

五月一日、霜村貞子（父、霜村盛郷、母同千代子の次女）と結婚。

昭和三十一年（一九五六年）

三月三十一日、関西大学大学院文学研究科修士課程を修了。修士論文題目「元暦校本萬葉集巻十七・巻十八をめぐっての小見」。

四月一日、関西大学第一高等学校教諭に昇任。

昭和三十二年（一九五七年）

七月十八日～八月二日、第四回関西大学・島根大学共同隠岐文化総合調査に吉永登教授、土部弘講師らと国文学国語学班員として参加。成果は『隠岐――隠岐文化総合調査報告――』（昭和43年）に発表。

十一月一日、関西大学第一中学校の教諭を兼務（昭和三十七年三月三十一日まで）。関大一中、天六学舎より現在地に新築移転。

昭和三十五年（一九六〇年）

四月一日、関西大学文学部非常勤講師を依嘱される（昭和四十二年三月三十一日まで、更改依嘱）。

六月十八日、関西大学国文学会研究発表会（千里山学舎大学ホール）において、「挽歌の成立」を発表。

十一月六日、萬葉学会研究発表会（関西大学大学院学舎）において、「類聚古集の部類」を発表。

昭和三十六年（一九六一年）

四月一日、関西大学第一高等学校兼ねて第一中学校の図書主任に補職（翌三十七年三月末日まで）。

四月二十八日午後、翌二十九日（天皇誕生日）、翌々三十日（日曜日）の両日に強化練習をするヨット部員の高二生ほか計四名が、西宮ヨットハーバー

の艇庫から無断でディンギー級一艇を繰り出し、滑艇中転覆し、二名生還し救援を求め、二名不明という事故を起こした。当日夜からヘリコプターまで出動という関係各方面の絶大なるご助力を得て五月七日夜まで十日間にわたり、捜索本部を設置して、教員も交代で出動し沿岸パトロールするなど手段を尽して、不明者の捜索活動を続けたが遺体は見つからなかった。本部解散の翌五月八日午前、芦屋市打出西蔵町沖合で芦屋漁協員某氏のイワシ網に一遺体がかかった。次いで、四日後十二日夕刻には西宮市今津真砂町の波打際でさらに一遺体が寄っていたのを地元の某氏によって発見された。この第一報が三島律夫学校長に届いた時、たまたま職員室にいたこととかで、現場に直行するようにと命ぜられ、結局は小生が遺体との最初のご対面となった。このいわゆる西宮におけるヨット転覆不祥事件は、かような関わりにおいて印象強烈である。

十一月二日、新しい体育館兼講堂の竣成式と創立五十周年記念式とが挙げられた。同日、旧講堂兼体育館を図書館として増改築し、視聴覚教室を併設した。折から開催中の「ルーブル美術館展」（京都国立博物館）見学の事前学習を、さっそくこの視聴覚教室において、高・中全クラスを対象に、教務部監修のもと、事務室関係者の全面的協力によって実施し、高く評価された。

昭和三十七年（一九六二年）

三月三十一日、関西大学第一高等学校を辞任。

四月一日、帝塚山（てづかやま）短期大学（学校法人帝塚山学園設置、奈良市所在）文芸科（日本文芸専攻）専任講師に就任（昭和三十八年三月三十一日まで）。

昨三十六年十一月に、帝塚山学院短期大学（学校法人帝塚山学院設置、大阪市住吉区所在）より明年四月より本学専任教員として採用と申し渡されていた。しかるに、姉妹校帝塚山学園設置の短期大学の完成年度に着任予定の某々氏が一身上の都合で不能となった、さっそく善処方を画策したがいかようにも相叶わぬゆえ、双方関係者の諒解に従い、貴君は奈良の短大へと赴任されたい、と二月を目前に告げられた。大阪への人事をお取り計らい下さった某氏も同様の事情を述べ、丁重になにとぞよろしくと仰しゃるので、応諾する。

昭和三十八年（一九六三年）

四月一日、帝塚山学院短期大学文学科（文芸専攻）助教授に就任。

奈良の短大は大阪への移籍を拒否。学院短大の源高根助教授（のち、大阪芸術大学教授。一九九七年逝去）の奔走、専攻主任長沖一教授（のち、帝塚山学院大学教授。故人）の仲介・説得により収拾。退職金は支給されず、私学共済の掛金は新任校との間で正式結着のつくまで継続されていないことを、後に当学院退職時に知る。

四月以後、上代語辞典編修委員会〈代表澤瀉久孝先生〉編『時代別国語大辞典　上代編』（三省堂、昭和42年12月発行）の刊行直前

まで、主幹池上禎造先生、のち阪倉篤義先生のもと、繙修・校正に従う（京都大学教養部国語国文学教室において）。

昭和四十年（一九六五年）

十二月二十五日、同四十一年一月二十二日、二十九日、《円珠庵土曜講座》（大阪国文談話会主催。大阪市天王寺区空清町、円珠庵。）において、「大伴家持」をめぐって連続講義。

昭和四十一年（一九六六年）

四月一日、帝塚山学院短期大学学生部長に補職。

昭和四十二年（一九六七年）

三月三十一日、帝塚山学院短期大学を辞任。

四月一日、関西大学文学部助教授に就任。

同日、前任校帝塚山学院短期大学非常勤講師を依嘱される（昭和五十一年度まで更改）。

十月一日、金蘭短期大学（吹田市藤白台）国文科非常勤講師を依嘱される（平成十年度まで更改。ただし、昭和五十三年度を除く）。

昭和四十三年（一九六八年）

四月一日、浪速短期大学（マスコミ専攻、大阪市東住吉区矢田矢田部）に非常勤講師として出講。

昭和四十四年（一九六九年）

五月、すでに昨四十三年から東京大学や日本大学ほか諸大学で、相次いでいわゆる学園紛争が生起し、本学では社会学部において一月末に社会学会の運営等をめぐって学生による封鎖が行われた。これらの事態収拾のための本年五月二十四日の政府提案「大学の運営に関する臨時措置法案」、いわゆる大学立法反対ほかを掲げて学生の動きが活発化した。

六月、関西大学にも、いわゆる全共闘が結成され、右の大学立法反対、学生規定廃止等の五項目要求を掲げ大衆団交を要求する。大学当局の拒否を不当とし、二十日、第一部の学生約二百五十名が関西大学会館を封鎖。いったん、七月五日、警察機動隊により解除された。しかし、封鎖は法文研究棟、誠之館等に及び、全学休講の中、学園挙げて騒然とし、暴力事件も頻発し、事態収拾に向けて教授会を吹田市民会館、天六学舎等で開いたが、局面の打開はならなかった。

その後、中谷敬寿学長から提示された改革案案は、全学的賛成に至らず、学長は辞任。明石三郎学長事務代行の要請により、九月二十四日機動隊による封鎖解除が行われた。

国文学合同研究室は全共闘の法文研究棟における司令部相当の駐留所となり、同階の国文教員の研究室は彼らの居室になっていたので、合同研究室ともども掃除・物品の移動だけでも大変だった。廃墟とは言えないまでも、汚穢の臭気がなかなか抜けず、損壊・汚損はどうにもならなかった。学科の新入りかつ最若輩であり、大学近隣の居住者なので、先生方に何としても研究棟にお出ましいただけるような状態にというのは、精神的にも重圧

だった。

研究棟の封鎖直前に、谷澤永一教授の指示・先導により、合同研究室から、学科・学会の記録・関係書類、永年にわたり収集・蓄積の交換・受贈ほかの紀要・研究誌（未製本分をも含む）等、機関誌既刊号在庫分を、パッキングケースに詰め、併設校一高・一中に勤務の学科卒業生、運送・寄託に奉仕的に出動してくれた卒業生らによって搬出・分散寄託した。封鎖解除後もこれら大量の物品の持帰りは時機を見はからって、ということになった。また、昭和二十六年の夏から萬葉学会（法人会員を含め、その数約一千。機関誌は季刊）の本部をあずかっていたので、業務を渋滞なく処理するのもかような時分には結構気遣われた。

翌四十五年三月からの萬国博開催を前に高度経済成長と謳われているが、それに伴う物価・人件費の急騰著しく、私学は経営の悪化にあえぎ、諸大学とも学費改訂つまり値上げに頼らざるを得なかった。これが、右の学園紛争以後の火種の一つ。法人側も私大に対する国庫助成を政府ほか関係先に強力に働きかけた。法人は教員組合に対しても望みをかけたが、教学の現場各学部教員による組織づくりを望んだ。いつのころだったか、その活動組織成り、四十七年度の学部選出の委員ということで法学部の池垣定太郎教授（故人）と当時幹事校であった立命館大学衣笠学舎（京都市北区）まで何度か通ったことであった。以後、法人、教授会、組合も積極的に国庫助成推進のためにこれ努め、法人、教授会連合の議長校ともなり、運動体の一翼を担った。

学費改訂は本学でも回避できず、昭和四十七年度、五十年度と短期間に二度も実施せざるを得なかった。大学からの文書による窮状説明にもかかわらず、いずれの折にも、学生の組織間の衝突や、設備・器物の損壊も甚だしいことであった。かような折、学生が授業放棄を訴えて張ったバリケード除去に、中村幸彦先生（一九九八年逝去）がわれわれ同様に軍手を装着して立ち働かれたには恐縮のほかなかった。中村先生のかような時のなさりようは敬服あるのみ。

十二月二十日、二十七日に分けて、《円珠庵土曜講座》において、万葉集巻一51～60を講読。

昭和四十五年（一九七〇年）

四月一日、関西大学教授に昇任。

十月一日、関西大学文学部学生主任に補職（学部長藤本是教授）。

昭和四十四年七月十日に同和対策事業特別措置法が十年間の時限立法として公布された。ところで、右、学生主任在任中、「橋のない川」の学内における上映をめぐって、学生間の対立から双方に係わる社会人が学内に立入り、ゲバ棒を用いる、放水する等の乱闘を引き起し、両者間の暴力的運動に巻き込まれるということがあった。授業料値上げの反対運動同様に、いまだに学園紛争当時のゲバルト闘争は終熄していないのである。

二部においては、徹底的封鎖はなかったが、この時期には、やはり学生組

織が運動体と対立したり、教学・法人に公開質問を発したりで、一・二部の枠を越えて島田三千男助教授（のち、教授。広島での被爆者、一九九一年逝去。）ともども、学生主任は最前線でそれなりの対応を迫られた。

昭和四十六年四月からは、浦西和彦専任講師（現教授）らの来任によって大いに助勢してもらえる状況に変った。

昭和四十六年（一九七一年）

四月十四日、文学部教授会の承認事項を学長により否認されたので、抗議して学生主任を辞任。

昭和四十八年（一九七三年）

三月三十一日、「日本上代文学の研究」により、関西大学から文学博士の学位を授与される。

十一月二十四日、十二月一日に分け、《円珠庵土曜講座》において、「家持初期の相聞歌」と題し連続講義。

昭和五十年（一九七五年）

七月六日、萬葉学会研究発表会（大阪狭山町現、大阪狭山市）帝塚山学院大学）において、「大伴家持と防人歌」を発表。

十二月七日、関西大学飛鳥文化研究所・明日香村中央公民館共催の第一回飛鳥史学文学講座（明日香村中央公民館）において、「藤原京と香久山」を講演。

かような一般市民を対象とする、本学の係わる公開講座の類は、学園紛争後、廣瀬捨三学長が発足させた改革調査委員会において構想されたものである。大学は市民社会からも常にその要求を汲み取り、研究・教育を通してその成果を市民社会に還元する存在でありたいとする、建学の精神に基づくものである。

右の「開かれた大学」の構想の具体的な試みは、昭和四十七年度から吹田市と共催で、「吹田市民大学教養講座」として発足している。以下、本年譜において各年煩わしいほどの記事に見受けられるものは、おおかた法人事務局内の広報課（近年に至り生涯教育課）あるいは関西大学教育後援会の企画・運営、さらには依頼・紹介によるものである。そして関西大学校友会（たとえば、地方支部の総会における講演）、各方面で活躍中の校友（その関係先でお世話になっている卒業生も多いので）、学内関係者という断ちがたい絆による依頼もある。これらは、過密な日々のことゆえほとんどお断りした。ずいぶん大勢の方々のご好意、ご支援をありがたく、かつは御迷惑を及ぼしたことを申訳なく思う。

昭和五十一年（一九七六年）

六月一日より昭和五十七年五月三十一日までの六箇年（二箇年ずつ三期の更改）の間、吹田市社会教育委員を依嘱される。

この間、関連施設等の見学、諮問に対する答申案づくり等々で多大の学習をさせていただいた。

退職後の父が地区・連合の老人会でお世話になり、また、ささやかながら

奉仕めいたことにかかわっていたので、お礼にもという気持でお引受けしたが、これが機縁でどうにもならないことになってしまった。さらに、翌五十二年十月に大阪府婦人会館に出向くことになってから、公共の社会教育関係機関による依頼に拍車がかかる。地区公民館・婦人学級・母親学級・老人大学等さまざまであるが、まるで女性専科みたいなことになってしまった。丁重に、どうにも逃り繰りがつかないワケを述べてお断りしたつもりでも、社会教育委員会からの紹介なのにと、つまり、あなたは社会教育委員をなさっておいでなんでしょう、とはおっしゃらなくても、これを独鈷に取られてはたまらない。かような中にあって、受講者グループ直接でも、心から「学びたい」の気持が電話を通じて伝わってくるものがあれば、都合のつく範囲内において一度は参上した。

九月七日、関西大学・吹田市教育委員会共催の第五回吹田市民大学教養講座〈日本文学史の10大作家とその代表作〉（吹田市立市民センター）において、「大伴家持と『萬葉集』」を講演。

十一月七日、第二回飛鳥史学文学講座において、「元興寺の鬼」を講演。

十一月二十二日、父・早身、急性心筋梗塞により死去（延命医療拒否を平素より主張。素志に従い、かかりつけの医師により在宅加療。満八十歳に四十日余不足）。

十二月四日、十一日に分けて、《円珠庵土曜講座》において、萬葉集巻第三415～442を講読。

昭和五十二年（一九七七年）

九月二日、第六回吹田市民大学教養講座〈日本文学の魅力的な10人のヒロイン〉において、「額田王」を講演。

十月、吉永登先生（関西大学名誉教授 一九八九年逝去）の体調不良により、大阪府婦人会館（大阪市東区 現、中央区 上町）の同好会事業としての〈萬葉集全講の会〉「萬葉同好会」（昭和47年3月発足、月一回）を引継ぐ。

平成10年11月現在、大阪府立文化情報センター（大阪市北区中之島）において、巻八、秋相聞を続講中。

以後、これを機縁に、右婦人会館主催の〈教養講座〉「文学」のうち「万葉集入門」等と題し、講義（年間10回）、館外研修「万葉大和の故地を訪ねて」（年1回、または春・秋2回）の講師を四、五回依頼される。（＊詳細未確認）

十一月六日、第三回飛鳥史学文学講座において、「中大兄三山歌」を講演。

昭和五十三年（一九七八年）

四月一日より一箇年間、本年度関西大学国内研究員として「萬葉集流伝史の文献学的研究」に従事。成果は『校本萬葉集』（新増補十一～十六。昭和55年～昭和57年）に大きく反映する（共編著）。

九月八日、第七回吹田市民大学教養講座〈日本文学愛唱詞華集〉に

おいて、「万葉集」を講演。
十一月五日、第四回飛鳥史学文学講座において、「持統女帝と吉野行幸」を講演。

昭和五十四年（一九七九年）

八月五日、第五回飛鳥史学文学講座において、「平城京人と明日香」を講演。
八月十八日、二十五日に分けて、《円珠庵土曜講座》において、萬葉集巻第三673～690を講読。
九月七日、第八回吹田市民大学教養講座〈旅ゆく日本文学〉において「ヤマトタケル〈古事記・日本書紀〉」を講演。

昭和五十五年（一九八〇年）

四月一日、同志社大学大学院文学研究科修士課程に非常勤講師として、五十七年三月末日まで出講（五十六年四月、更改依嘱）。
七月六日、第六回飛鳥史学文学講座において、「持統帝以後の吉野――文学にみるその変質――」を講演。
十二月十三日、二十日に分けて、《円珠庵土曜講座》において、万葉集巻第五892～896を講読。
なお、本年某月某日、朝日カルチャーセンター（大阪、北区中之島）〈文学〉において、万葉集の部立のうち「雑歌」を分担し講説した（＊詳細未確認）。

昭和五十六年（一九八一年）

七月五日、第七回飛鳥史学文学講座において、「飛鳥川をめぐって――万葉集を中心に――」を講演。
十月一日、第十回吹田市民大学教養講座〈日本文学史の愛の系譜〉において「サホビコとサホビメ〈古事記〉」を講演。

昭和五十七年（一九八二年）

一月二十七日（第一回）より昭和五十八年七月二十一日（第十二回）の間、大阪府私立高校教育振興方策懇談会委員（学識経験者として）を大阪府より依嘱され、答申する。
三月、現住所（吹田市千里山西二丁目一〇－二二二）に移居。
四月、大阪府婦人会館において同好会事業「さわらび会」〈萬葉集全講の会〉を開講。（会員は、おおむね府婦人会館主催の〈入門講座〉「萬葉集」の受講者）平成十年十一月現在、巻六（雑歌）の天平五年中の作歌を続講中（北市民教養ルーム＝大阪市北区茶屋町所在、大阪市教育委員会社会教育部所管＝において）。
五月一日、近鉄「奈良歴史教室」セミナー（奈良市近鉄ビル内）において、「万葉の春日野あたり」を講演。
七月四日、第八回飛鳥史学文学講座において、「飛鳥びとの哀歓」を講演。
十月一日、関西大学一〇〇年史編纂委員会委員を委嘱される（平成八年三月末日まで）。

十月一日、第十一回吹田市民大学教養講座〈ラブシーンでたどる日本文学〉において、「優婆塞と吉祥天女〈日本霊異記〉」を講演。
十月八日、関西大学・大阪府立文化情報センター共催の「おおさか文化セミナー」〈文学に描かれた大阪〉において、「孝徳帝、難波宮に置き去りにされしこと」を講演（会場、大阪市北区中之島、同上センター）。
なお、本年某月某日、〈阪急文化セミナー〉「古代の女帝たち」（会場、大阪市北区、阪急ターミナルビル）において、「持統女帝」を講演（＊詳細未確認）。

昭和五十八年（一九八三年）

三月五日、大阪府知事（岸昌）より、社会教育に功労ありと、大阪府婦人会館開館二十周年記念式典において表彰される。
三月十六日、四月十三日に分けて《千里文芸サロン》（豊中市、千里中央よみうり文化センター）において、シリーズ〈叙景歌の成立〉のうち「高市黒人」「山部赤人」を講義。
四月一日、大阪成蹊女子短期大学国文科非常勤講師を依嘱される（平成五年度まで、更改依嘱）。
八月二十一日、第九回飛鳥史学文学講座において、「飛鳥朝貴人の恋」を講演。
九月三十日、第十二回吹田市民大学教養講座〈名文句・名セリフでたどる日本文学史〉において、「天人の志（こころばえ）――『丹後国風土記』逸文――」を講演。
十月八日、十五日に分けて、大阪国文談話会主催《契沖記念土曜講座》（大阪市東区（現、中央区）本町、相愛学園）において、萬葉集、巻第七（分担の歌番未詳）」を講読（＊詳細未確認）。
十一月二十五日、大阪府高等学校国語研究会古典部会の定例研究会（大阪市北区）において「羽衣伝説」と題し講義（＊詳細未確認）。

昭和五十九年（一九八四年）

八月五日、第十回飛鳥史学文学講座において、「二人の藤原夫人」を講演。
九月七日、第十三回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみる女性像〉において、「持統天皇」を講演。
九月の夏期休暇明けから、大谷大学文学部（京都市北区）に、某講師（病気の後を承けて、作品研究「万葉集」に非常勤講師として出講（学年末まで。＊詳細未確認）。

昭和六十年（一九八五年）

七月某日、羽衣学園短期大学（堺市）夏期講座で「万葉女流歌人の相聞歌」を講演（＊詳細未確認）。
八月四日、第十一回飛鳥史学文学講座において、「前車の轍」を講演。

九月二十一日、関西大学・寝屋川市教育委員会共催の第四回寝屋川市民大学（寝屋川市中央公民館）において、「壬申の乱前後の文学」を講演。

昭和六十一年（一九八六年）

六月三日、関西大学・赤穂市教育委員会・赤穂市連合婦人会共催の第二回あこう婦人大学講座（赤穂市民会館）において、「狭野弟上娘子――流人中臣宅守との贈答――」を講演。

七月五日、第五回寝屋川市民大学において、「新羅への使人たち」を講演。

八月三日、第十二回飛鳥史学文学講座〈歴史の転換期における日本文学〉において、「歌人志貫皇子の王子・王孫たち」を講演。

十月一日、関西大学学術研究助成基金助成委員会委員を委嘱される（昭和63年9月30日まで）。

十月十七日、第十五回吹田市民大学教養講座において、六月の赤穂市の講座と同題で講演。

昭和六十二年（一九八七年）

八月二日、第十三回飛鳥文学史学講座において、「秋さらば相見むものを」を講演。

十月九日、第十六回吹田市民大学教養講座〈歴史の転換期における日本文学〉において、「壬申の乱前後の文学」を講演。

十一月一日、関西大学大学院文学研究科長補任。教育助成基金助成委員会委員、大学院委員会委員を依嘱される（昭和63年9月30日辞任。他の諸研究科の任期が10月1日より2年であることに鑑み、この際同調）。

当年より翌年（63年）にかけて、十回前後にわたり、（財）ベター・ホーム協会主催〈文化教養講座〉において、「万葉の四季を読む」と題し、連続講義（大阪市北区全日空ビル）。＊詳細未確認。

昭和六十三年（一九八八年）

八月七日、第十四回飛鳥史学文学講座において、「長屋王とその周辺」を講演。

十月一日、関西大学学術研究助成基金助成委員会委員を委嘱される（平成4年9月30日まで）。同日付、同委員会副委員長を委嘱される（平成元年9月30日まで）。

十月二十一日、第十七回吹田市民大学教養講座〈日本文学に描かれた別れのドラマ〉（吹田市民会館）において、「柿本人麻呂における妻との別れ」を講演。

十一月二日午後、大阪城ホールにおいて、関西大学創立一〇〇周年記念式典。引続いて記念祝賀会（ホテルニューオータニ大阪）。また、記念式典会場において、記念校友会総会開催。当日の記念式典参会者ならびに在学者全員に、目で見る関西大学百年史とも称し得べき、豊富な写真で語る「関西

大学百年のあゆみ」（A4変型、総一二七ページ）を配付。式典当日までに発刊（奥付の発行日は以下の二冊も11月4日）されたのは、「関西大学百年史　通史編　上」（A5総一一五〇ページ）「関西大学百年史　人物編」（A5総九三〇ページ）あわせて三冊であった。年史編纂委員としては、一般的には関係学部（校・園）、関係部局等の関係・関連箇所の記述を精読・考査し、疑問・不審箇所をそれぞれ関係者に問いただすのである。しかし、専門委員中でも総括担当はそれらとは別に全巻の校正刷りに目を通し、文字・文辞の校正はいうまでもなく、写真・地図・図表・附注にも目を凝らし、不適切な箇所は無いかと検分し、担当者に回付する。それらの中、数字の検証が最も困難である。この専門委員の総括校閲は、世間に横行するヤワな監修とは、全然次元の違う作業である。「人物編」においては、原稿の取扱い・処理にはなはだ難儀した。各項が同一の執筆要領によって取りまとめられたものばかりではない。さらに、資料としては項目当人の回想録・伝記・追悼文集等さまざまで、分量の突出して多いものなどは、この際あえて項目執筆者名から目をそらして、かなり縮約・割愛せざるを得ない。

平成元年（一九八九年）

三月八日より同月中三回に分けて、大阪市主催の文学講座〈シリーズ・日本人のこころ〉（会場・大阪市立労働会館（東区〈現中央区〉森の宮）において、「柿本人麻呂とその作品」と題し連続講義。

四月一日付、本年度の学部共同研究費を統一主題「語彙論を中心とした日本語の歴史的研究」により受ける。成果は主として「校本萬葉集十八」（平成6年12月）に傾注する。

八月六日、第十五回飛鳥史学文学講座において、「柿本人麻呂歌の儀礼性」を講演。

十月一日、関西大学学術研究助成委員会委員長を委嘱される（平成2年9月30日委員長を辞任。引続き同4年9月末日まで委員。）。現在の基金では、海外との共同研究は不可能。規定の関係条項は無効に等しいので最低額一億円の基金増額をと法人に申入れるが、明快な回答得られず。二年後に右増額回答あり。

十月二十一日、萬葉学会公開講演会（宮田林市、大谷女子大学）において、「柿本人麻呂作歌の儀礼性」と題し講演。

平成二年（一九九〇年）

二月二十日より三月二十日の間（全9回）、大阪市主催の文学講座《万葉歌人群像（その一）》を「初期万葉の歌人達」と題し開講。

三月五日より同月二十六日まで（全4回）吹田市民会館において古典文学講座《万葉集探訪（その一）》を「万葉路に入り立つために」と題し開講。

四月二十七日より同三年二月二十二日まで（十一月を除き月一回、全10回）、平成二年度女性セミナー（吹田市立婦人会館）において「万葉の種々相」と題し開講。

六月一日、関西大学大学協議会協議員を委嘱される（平成4年5月31日まで）。
八月五日、第十六回飛鳥史学文学講座において、「人麻呂歌に見る習俗・信仰」を講演。
十月九日、おおさか文化セミナー（大阪府立文化情報センター）において「河内の人柱――信仰と技術革新――」を講演。
十月十二日、第十九回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみるグルメ〉において、「萬葉の飲食――遊宴と日常と――」を講演。
十一月十日、海南市藤白神社参集殿において、《紀の国文化フォーラム'90》分散会で「熊野懐紙――文学としてみたる――」と題し基調発表。
十一月十一日、〈有間皇子まつり〉において、「有間皇子の周辺」と題して講演（同右所）。

平成三年（一九九一年）

二月十一日より三月二十六日の間（全9回）、大阪市主催の文学講座〈万葉歌人群像（その二）〉を「飛鳥浄御原宮と藤原宮時代の歌人たち」と題し開講。
三月二十七日、伊丹市生涯学習大学（伊丹市中央公民館）において、「萬葉集と大和三山」を講演。
五月より十一月の間（八月を除き、全10回）文学講座「万葉散策」（摂津市立婦人労働会館）において「万葉の夜明け前から近江朝前後まで」を開講。
六月五日より七月二十四日まで（全8回）古典文学講座〈万葉集探訪（その二）〉を吹田市民会館において「初期万葉の人々」と題し開講。
八月四日、第十七回飛鳥史学文学講座において、「〝悲劇〟の人・有間皇子――研究史より説話化をたどる――」を講演。
八月二十一日より九月二十一日の間（全9回）大阪市主催の文学講座〈万葉歌人群像（その三）〉を「平城京時代の歌人たち①」と題し開講。
十月二十五日、第二十回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみる合戦（いくさ）の諸相〉において、「斉明朝の外征――『不敗の神国』――」を講演。

平成四年（一九九二年）

三月三十一日、「関西大学百年史　通史編　下」（A5総一三一〇ページ）刊行。「七〇年史」を承けて新たに着手した部分。執筆者にとってもほんとに生々しい同時代史。かなり多くの関係者が在世中なので記述には十分配慮し、各委員・関係部局において回覧・閲読を経る。いわゆる学園紛争、人権問題には議論を尽くした。関係資料は、保留したものをも含めて、当時のナマの資料を本「年史」の資料編および「年史紀要」の一冊として丹念に翻

刻・復刻した。

四月六日より五月十八日まで関西大学総合図書館において開催の第二十八回展示・展観「流伝の萬葉集」の企画・構成・展示に協力。展観目録を執筆。

五月八日より七月十七日まで（全8回）古典文学講座《万葉集探訪（その三）》を吹田市立婦人会館において、「天武・持統時代の歌びとたち――柿本人麻呂および人麻呂歌集を中心に――」と題して開講。

八月九日、第十八回飛鳥史学文学講座において、「万葉集の『七夕』歌――『七夕』伝承の受容と変容の諸相――」を講演。

平成五年（一九九三年）

二月二十三日より三月二十三日までの間（全9回）、大阪市主催の文学講座〈万葉歌人群像（その四）〉を「大伴家持と同時代の歌人たち――平城京時代の歌人たち②――」と題して開講。

本年四月より平成七年三月までの二箇年間、関西大学より「『萬葉集』の本文批評的研究ならびに『萬葉集』古注釈の文献学的研究」について学術研究助成を受ける。従前の継続的成果とともに『校本萬葉集』の第二次新増補・修訂に全面的に投入する（共編者として平成6年3月より同7年11月の間に刊行）。

六月二十二日、おおさか文化セミナー（大阪府立文化情報センター）において、「井上通泰の学問――万葉集研究をめぐって――」を講演。

八月一日、第十九回飛鳥史学文学講座において、「巡行する国守大伴家持」を講演。

十月九日、関西大学・河北新報社共催の関西大学文化セミナー（仙台市「ろうふく会館」ホール）において、「みちのく山に黄金（くがね）花咲く――大伴家持の万葉歌をめぐって――」を講演。

平成六年（一九九四年）

二月二十二日より三月二十三日の間（全9回）、大阪市主催の文学講座〈万葉歌人群像（その五）〉を「東国の歌・防人の歌」と題して開講。

五月十一日より六月二十九日の間（全8回）吹田市民会館において、古典文学講座《万葉集探訪（その四）》「柿本人麻呂の作品を読む」を開講。

八月七日、第二十回飛鳥史学文学講座において、「東大寺大仏造立と大伴家持――家持作『陸奥国出金詔書』歌をめぐって――」を講演。

八月三十一日、「関西大学百年史　年表・索引編」（A5総五五四㌻）刊行。通史編（上・下）・人物編・資料編とは独立した、しかし、それらに密着した存在であることはいうまでもなく、それらの閲読・利用にまことに便

利な一巻である。このハンディーな中に、これだけのものを見事に盛り込んだことよと感嘆久しくする、年史編集事務局の制作にかかる一冊。

九月二十二日より二十七日の間、廣瀬捨三先生蔵『萬葉集〔廣瀬本〕』大阪で初めて公開される（関西大学図書館創設80周年・関西大学文学部創設70周年を記念して開催（大丸心斎橋店 大阪市中央区）の「おおさか文藝書画展――近世から近代へ――」において）。

十月二十九日、関西大学・西日本新聞社共催の関西大学文化セミナー（福岡市、福岡商工会議所ホール）において、「万葉集における〈都〉と〈鄙〉」を講演。

十一月十九日、関西大学・加茂町教育委員会共催の第一回加茂町民大学講座〈歴史と文学の旅〉（京都府相楽郡加茂町民文化センター）において、「萬葉集における旅――大伴家持の場合――」を講演。

平成七年（一九九五年）

一月十七日、早暁、阪神淡路大震災発生。

二月二十一日より三月二十二日の間（全9回）、大阪市主催の文学講座〈万葉歌人群像〈その六〉〉を（Ⅰ）「遣外使らをめぐる歌」（Ⅱ）「作者未詳の長歌群」（Ⅲ）「由縁ある歌ならびに雑歌」の三シリーズとして開講。

六月六日、おおさか文化セミナーにおいて、「萬葉集に見る遣外使たち」を講演。

八月六日、第二十一回飛鳥史学文学講座において、「大伴家持における異境体験――越中守時代を中心に――」を講演。

九月十五日、毎日放送・MBS企画による〈一〇、〇〇〇人 万葉への旅立ち〉（大阪城ホール）において、「万葉集の古写本」コーナーを支援し、入場者への説明・質疑応答を担当。

十月十四日～十七日、萬葉学会第四十八回全国大会の前半二日間を関西大学一〇〇周年記念会館において開催する。

木下正俊教授が翌春三月をもって定めにより退職なさるので、会場校として名乗りをあげた。動かせない日程のために、会場確保ひとつに四年越しの粘り。後半二日間の研修旅行のコース選定・案内を清原和義武庫川女子大学教授（一九九七年急逝）、および同学内の協力者大森亮尚教授にこれも先年確約ずみ。ところが、年初一月の大震災により、東瀬戸内コースの予定が廃案。勤務先・自宅の被災者であるご両所に代替コースの選定を早速にお願いする。「雄波津・住吉～葛城・平群谷」のコースで充溢させていただいた。改めて、ここに感謝の念をささげる。

前日の会場設営、終了当夜の会場撤収には、教育後援会事務局の方々のお力添えがなければ、学生部を通じての補助者の動員があっても、奇蹟的な短時間で整然とは事が運ばなかった。蓄積されたノウハウの凄さに敬服の念に併せて心からなる感謝を申しあげる。

学会の前半において、本学からは第一日の公開講演会では木下教授「廣瀬

本萬葉集――その後のことなど――」、第二日の研究発表会では鍵本有理嬢「対象語格を表す「の」「が」について」があった。

学会本部所在の大阪市立大学の村田正博助教授（当時）が、この全国大会の総括責任者としてすべてを綿密に取り運んで下さった。

今回の大会期間中の詳細は「萬葉」第百五十六号の村田氏の報告にありがたく記し留められている。連日、好天に恵まれたうえに、学内（国文学科・研究室の支援があったことは言を俟たぬ。外の大勢の方々のご支援によって恙なく事を運び了えられたことに篤い謝意を表する。

十月より、毎日放送（大阪）、北日本放送（富山）で開始の「楽習講座《時代へ　風土へ　萬葉の旅》」の第五回「播磨灘・室津」を担当。

十一月二十五日、関西大学・中部日本新聞社共催の関西大学文化セミナー（名古屋市、中日新聞社本社ホール）において、「大伴家持の文芸――越中時代を見据える――」を講演。

平成八年（一九九六年）

三月三十一日、「関西大学百年史　資料編」（A5総一五五〇㌻）刊行。「通史編（上・下）」執筆時に手控えた、またその後に発掘あるいは提供された資料も加えられた。将来の年史編纂に際し、本学のみならず他大学にあっても、要求に十分応え得るのみならず、教育史・教育制度史等の研究にも発展的利用の可能な、充実した一巻に仕上っている。直接の担当者、関係部局の積年の功労の総集が、本巻を加え、「関西大学百年史」として立派な成果をもたらした。相共に心から慶賀する。

四月一日、関西大学年史編集委員会委員、同時に同副委員長を委嘱される（平成十一年三月末まで）。

四月一日付、本年度の学部共同研究費を統一課題「〈文学・芸術と思想〉の研究」により受ける。成果は、「広瀬本万葉集あれこれ」および「萬葉集における「遊」をめぐって」として別途発表。

五月十二日、第二十二回飛鳥史学文学講座において、「大伴家持と大伴池主――万葉集の形成をめぐって――」を講演。

七月六日、近鉄日本文化会講座（東京都千代田区、日本交通会館）において、〈古代の争乱〉「大津皇子――萬葉歌を中心に――」を講演。

九月二十七日、第二十五回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみる貧富の問題〉において、「山上憶良に見る"貧富"論――『貧窮問答歌』をめぐって――」を講演。

十月八日、関西大学・伊丹市立図書館共催の第三回伊丹市立図書館文学セミナー（伊丹市立図書館）において、前月開催の吹田の講座と同テーマ、同題で講演。

十月十二日、甲府市山梨県立文学館で国文学研究資料館と共催の〈甲府と万葉集〉において、「広瀬本万葉集あれこれ」を講演。

平成九年（一九九七年）

八月十日、第二十三回飛鳥史学文学講座において、「大伴家持と大伴池主――越中時代の作品形成を巡って――」を講演。

九月二十六日、第二十六回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみる〈法〉の問題〉において、「萬葉集における律令――歌人の官人的側面――」を講演。

十月十四日、第四回伊丹市立図書館文学セミナーにおいて、前月の吹田の講座と同テーマ、同題で講演。

十二月十三日、関西大学国文学会研究発表会（総合図書館）において、「天平十九年春夏の交における大伴家持」を講演。

平成十年（一九九八年）

六月十一日、第二十七回吹田市民大学教養講座〈日本文学にみる酒の話〉（新関西大学会館北棟）において、「酒と宴――萬葉集を中心に――」を講演。

八月九日、第二十四回飛鳥史学文学講座において、「大伴家持と大鷹の歌」を講演。

十月二日、第五回伊丹市立図書館文学セミナー（伊丹市立総合教育センター）において、六月開催の吹田の講座と同テーマ、同題で講演。

平成十一年（一九九九年）

三月十四日、関西大学一〇〇周年記念会館ホールにおいて、「白妙の衣干したり」と題し最終講義。終了後、国文学科同窓会。

三月三十一日、定年延長満了につき関西大学を退職。

《附記》

本年譜の作成に際しては、浦西和彦教授の熱誠溢れる礎稿の提供を辱うした。これ無くしては、小生の記憶の喚起・再生もなく、また関連事項の調査も不可能であった。かえって蛇足的私注を附し不整を来した。ここに記して、浦西教授にひたすら厚謝し、深謝の意を表する。